

第6室 書跡

－法隆寺伝来の法華經－

N-12 法華經（ほけきょう）

黄麻紙に薄墨の界線をほどこした料紙に、『法華經』8巻を通例の一行17文字詰めに書写しています。やや肉太で、力強い筆運びで書写され、全巻一筆です。奈良時代の整然として端正な写經に比べるとやや柔らかみを帯びており、書写の時期が平安時代にかかっている可能性があります。

第6室 染織

—蜀江錦帯と白氈—

今回は法隆寺に伝来した古代の染織品の中で最も名高い作品の一つである「蜀江錦帯」とあわせ、白氈の展示をします。飛鳥から奈良時代にかけて法隆寺で用いられたこれらの作品は、人から人へ伝えられた「伝世品（でんせひん）」としては、世界最古の染織品コレクションとして知られています。いまから1300年以上昔に作られたとは思えない鮮やかな色彩を残す蜀江錦、またはるばる大陸から伝えられた白氈からは、飛鳥時代から奈良時代にかけての高い芸術性と国際性を知ることができます。

N-47：蜀江錦帯（しょっこうきんおび）

蜀江錦は法隆寺に伝来した染織品を代表する錦です。この錦は技法上から経錦（たてにしき）と呼ばれるもので、経糸方向に色糸を使い、その浮き沈みで文様が表わされています。奈良時代以降、現代まで一般的に織られている錦は緯錦（ぬきにしき）といい、横糸で文様を表わしますが、経錦はそれ以前の古い技法です。

古代中国の蜀（現在の四川省成都市）では色鮮やかな赤地の錦が特産であったと伝えられ、これにあやかり法隆寺に伝来した赤地の経錦には「蜀江錦」という美称があります。格子のなかに可憐な蓮華文を収めた美しい錦であり、法隆寺の伝承では聖徳太子のお妃であった膳妃（かしわでのきさき）の帯とされています。

N-43：蜀江錦褥残欠 表裂（しょっこうきんじょくざんけつ おもてぎれ）

褥（じょく）と呼ばれる敷物に使われていた蜀江錦です。鮮やかな赤地に亀甲繫文を配し、その中に花や鳥、犬のような動物などを納めています。古代の錦は同じ文様のくりかえしで全体を構成するのが一般的なのですが、この作品の場合、織幅をなす横一列の文様に同じものがないのが特徴的です。

N-54-1：白氈（はくせん）

氈とは羊毛で作られた敷物で、現在の絨毯（じゅうたん）のようなものです。古代の寺院では僧侶の敷物として用いられ、わが国では法隆寺と正倉院にのみ伝えられました。

羊毛を分厚くならべて水分を与え、これを巻き上げて圧縮させることで、乾いていくうちに毛が絡み合い、一枚の敷物となりました。つまり現在でいうところのフェルトの技法で作られた敷物です。

氈は現在も遊牧民が使用しており、この作品もおそらく中央アジアで作られた後に唐へ至

り、そこから海を越え、遣唐使によって伝えられたものと考えられます。一見地味な作品ですが、その背後には古代日本における壮大な国際交流が控えているのです。